茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.111

游美

Contents

1　松川 誠さんの作品と作品についての言葉
2-3　美術鑑賞旅行
4　作家探訪　石村 雅幸先生
5　絵画講習会
　　会員のためのギャラリートーク
6　心に残る私の一点
　　あとがき



松川　誠　《仁王像》
2024年
油彩・カンヴァス／F80
2024年度茨城県芸術祭美術展覧会

「ああ、どうしよう、時間が無い。先生のコメントを全部は反映できない。屋外が暗過ぎるし、室内が明る過ぎる。それに、仁王の顎がやや大きいし、首回りが少し変だ。どうしてこうなった？直せるか？それにしても時間が無い。ああ……」というのが、県展の搬入日２日目の朝だった。そんな時、高い所から「どうせへたくそなんだから、さっさと持っていきなさいよ」という、少々投げやりな連れ合いの声が聞こえてきた。で、急ぎ生乾きのキャンバスにサインを入れ、仮縁に収めて近代美術館に着いたのがお昼前だった。だから、まさか入選するとはこれっぽっちも思っていなかった。

それにしても游美の編集者は、本紙に寄稿して頂く方の人選に相当苦労されているらしい。単純に絵画が好きというだけのビギナーから抜けられない私なんぞに、どうして表紙の原稿を依頼したのだろうか。「出来る事は断らない」が信条とは言え、本当に恥ずかしい事この上ない。　（水戸市在住）

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.112

游美

Contents

1　富田 四郎さんの作品と作品についての言葉
2-3　海外美術鑑賞旅行
4　館長講演会
副館長あいさつ
5　木村武山生誕150年記念日帰りバスツアー
6　会員のためのギャラリートーク
お知らせ・あとがき



富田　四郎《ひそひそ羅漢さま》
2024年／岩絵具・水干絵具・砂・和紙／F15号／2025年茨城新興展

何で知ったか思い出せないが、川越の喜多院というお寺に五百羅漢の石仏が有る事がわかった。

私は日本画を始めて40年近くになるが、近年絵具の材料に砂を加え始めた。渓流の岩や、梅や桜の古木の質感を表すのに丁度よかった。

「石仏？砂を使えばそれこそ石仏そのものではないか」。早速予定をたて少々遠いが取材に行くことにした。石仏が500何体か有るそうなので、心踊らせながら向かった。移動に時間がかかるためスケッチはできなかったが、おもしろそうなのを何体かカメラに収めた。その中でなんとも人間的で世俗的な羅漢さまを見つけた。「これはおもしろい」絵になると思い、制作を決めた。まず背景には、日本画独特の和紙を揉んでしわ模様をつけるもみ紙技法を用いた。制作の中で苦労したのは、自慢気に話す側と耳を傾けうなずくようなしぐさの羅漢さまのところ。その表情に、より親近感が生まれたように思う。またコケやサビを付けることにより、古色感の有るしっとりとした画面にまとまった。

（石岡市在住）

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.113

游美

Contents

1　川津 自見子さんの作品と作品についての言葉
2　前会長・新会長挨拶
3　作家探訪　宇留野 信章先生
4　美術鑑賞旅行
5　会員のためのギャラリートーク
6　絵画講習会・福本ヒデ講演会
理事会・代議員会報告
お知らせ・あとがき



川津　自見子（しげこ）《ナニワイバラの花》
2016年頃／顔彩・雲肌麻紙／F30号

何年か前になるが、庭の一角にナニワイバラが植えてあった。成長が早く、花が咲くのも早い。4月の中頃になるとあっという間に真っ白い花が咲き誇り、春の光の中で清々しく輝く。絵に描きたくなる光景だった。

私はずっと水彩画をやってきたが、重厚な日本画にも魅了されてきた。日本画での白い花は、風を感じ、儚さを感じ取れるように描くといわれるが、そこまでの技法は難しい。

この絵は胡粉の使い方が自己流で、絵全体にはもう少し深みが出せればよかった。今更ながら勉強不足を痛感している。

その後ナニワイバラは、枝が太くなり四方八方に伸び放題、花付きも悪くなり、ついに伐採となってしまった。

ここ数年絵から遠ざかっているが、また少しずつ季節の花などを描いていきたい、と思っている。

（ひたちなか市在住）